四重奏

夏の風が吹き　ゆたかな池の水はつめたく黒くゆれてゐた
素晴しい白い滝の水が正面に見えてゐた
水は流れ落ちて　ぶつかりながらしぶきをあげてゐた
しづんだ音がひびいてゐた
それをうつとりとして眺めてゐるあいつのほほはほてつてゐた

冬の風が木木をゆさぶつてゐる　白い流れは見えない
岩組が黒く見え　石が積み重なり　影は影を重ねてゐる
木は山の深い所でゆれてゐるやうにこまかな心づかひをしてゐるやうだ
羊歯がいつぱい毛のやうに茂つてゐたあたりに羊歯の緑は見えない
両側から枯れ枝が滝のあたりを抱きかかへるやうに前面でからみあつてゐる
まだあたたかい心を残してゐるやうだ
冬の空の大きいもも色の雲はもくもくと中の方のもも色が動いてゐる
ふくれあがりながら黒い雲に変りつつある
だんだん黒ずんでゐる　風は音たてて下から突きあげてゐる

池のまはりの木の根はむき出して垂れさがり　もう水はそれをひたしてゐない
木はその緑の影をゆらす水を失つてしまつたのだ
水はない　池はすべてをなくしてしまつたのだ
あいつのあたたかいくちびるも　ほてつたほほも　あいつの大きい乳ぶさの重みも
あいつのかすれたやうな一瞬の声も　俺のものであるのに
滝は流れおちてゐないのだ

木の根に　二匹の猛烈に強さうな犬が太い綱でつながれてゐる
片手に棒を持つた男が歯をむき出して一匹の犬の方に向つて行くと
犬もやはり歯をむき出し腹を下げてとびかからうとする
棒で打つとあと足を伸ばして犬はとびかかる　犬は首を綱でつながれてゐるので
奇妙な苦しさうな声をひびかせる
男は別の一匹の方に向つて行く　奇妙な犬の声がひびく
綱は片方がゆるむと片方がぴんと棒のやうにはりつめる
木の葉のそよぎが美しく水にうつつてゐたあたりに　赤土はむき出してゐる
赤土の上で男と二匹の犬がはねてゐる
汗をかいてゐる彼等のうしろの方には
池の底だつた赤土の上にばらばらに大きい白い石が乱れてころがつてゐる

角ばつた　安定を失つた石　ひつくりかへつてゐる石の群れ

俺は一人で眺めてゐるのだ
これからあいつとあふことを考へながら
不思議な変化を見下ろしてゐるのだ
あの雲のやうにもも色のあいつ
あの滝のやうにはげしく
笑顔が　はぢらひが　動作が
乱れた石の群れのひとつひとつの石があいつのからだに見える
俺は汗をかくだらう　棒で打つ男
俺は二匹の犬のやうに怒りあへぎ首をしめられるだらう
綱のやうに強く俺はあいつをしめつけるだらう
もも色の雲が黒ずみ風がゆたかな池を吹きすぎる
かすれたやさしい声であいつは俺に池のことを聞くだらう
しばらくのあひだ俺とあいつは息をひそめ
それぞれの思ひの中に滝のしぶきを感じるだらう